

有松絞り産業小史と現況

平尾 秀夫

目次

はじめに

- 1 有松の概要
- 2 有松絞りの生産工程
- 3 有松絞り以前の日本の絞り
- 4 有松絞り産業の創業、江戸時代
- 5 歴史に現れた有松
- 6 明治・大正時代—有松絞り産業の発展
- 7 戦前・戦中（昭和時代）の有松絞り
- 8 有松絞り産業の現状
- 9 有松絞り産業の新しい挑戦

結び

はじめに

有松は名古屋駅から名古屋鉄道で僅か20分くらいのところに位置する町である。この町は江戸時代から現在に至るまで著名な絞り染めの産地である。また、江戸時代の古くからの建物が多く現存しており、有松は町並み保存地区としても貴重な存在価値がある。

1年程前から、有松絞りに個人的に興味をもって、暇をみてはときどき有松を訪れていた。今年の7月中旬頃から東邦学園大学地域ビジネス研究所の地場産業研究部会の研究テーマの一つとして正式に取り上げ、現在共同研究調査を行っている。

本稿は当初からいままでに調査した中から「有松絞りの産業小史と現況」に内容を限定し

記述した。研究会としては、「有松絞り」と有松の町なみの関連、有松の人たちが熱心に取り組んでいる「まちづくり運動」、「有松絞りの将来展望」などについても調査研究を行っている。有松の総合的な研究報告は研究部会のこれからの調査研究に委ねたい。

1 有松の概要

有松は宿場町鳴海から少し離れた東海道筋のところにある。慶長5年（1600）の関が原の合戦のあと、江戸と関西を結ぶ交通が次第に盛んになったが、有松の辺りは松林の生い茂る場所であり人家もなく淋しいところであった。治安に責任をもっていた尾張藩はその辺りに部落を作る必要性を感じて、慶長13年（1608）に次のような布告を知多郡に触出して有松に住むことを奨励した。

「触書

知多郡之内 桶狭間村 新町之儀 諸役令を
免許候間 望之者有之於は 彼地へ可被越者也
仍如件

慶長十三年戊申二月十八日」

この布告の意味は、桶狭間村の支郷として新町を開村するのにあたり希望者を募り、移住者には諸役の類を免じて、免租地とするとの趣旨である¹⁾。

江戸時代に免租地であった地域の図面は、有松の久田耕一郎氏のお宅で拝見することができた。有松の中心地の道路沿いの数百メートルの範囲であった。

「寛文村々覚書」は尾張八郡の村勢一覧表である。これによれば寛文11年（1671）に有松の家数は31軒、人数151人、内男83人、女68名、往還筋270間である。

天明元年（1781）になると有松村は戸数110軒、人口は610人、そのうち下人121人となった。天明4年（1784）に大火が起こり有松の町を焼き尽くした。しかし有松の町は尾張藩の支援もあり比較的早く復興し、天保末年（1844）には全戸135軒、人口は516人、その他有松へ仕事で通う下人多数。内絞商（販売業）19軒であった。

現在の有松町は明治26年（1893）11月に有松町（有松村はその前年9月に町制を施行した）と桶狭間村が合併してできた町である。従って有松は有松町有松と有松町桶狭間で構成される。桶狭間は言うまでも無く織田信長が今川義元を討った著名な場所である。

合併当時、有松町は330戸、人口1,250人で、桶狭間は戸数97戸、人口480人で合計で427戸、1,730人であった。有松は絞りの町であり、桶狭間は農村地帯であったがお互いの結びつきは合併前から比較的強かったとされている²⁾。

明治27年（1894）の職業別戸数統計によれば、有松町では絞業310戸、農業100戸、その他50戸でおよそ70%が絞業に従事していた。

なお、2000年の国勢調査による人口などを図表1に示した。

2003年7月1日現在、有松は3,090世帯、8,814人で、桶狭間は2,470世帯、6,954人で有松町全体としては5,560世帯、15,768人である。昼間人口比率が67%と低く、他の地域へ昼間は働きにでる人の多く、ベッドタウン化が進んでいる。

図表1 有松町人口(2000年10月)

	有松	桶狭間	有松町合計
常住人口密度(平方和当たり)	8,664	5,980	14,644
就業者(人)	4,278	3,092	7,350
昼間人口(人)	5,710	4,023	9,733
就業者(人)	1,399	1,584	2,983
昼間常住人口比率(%)	66	67	67
昼間就業者比率(%)	33	51	41
面積(平方和)	1.283	1.813	3.096
常住人口密度(平方和当たり)	6,753	3,298	4,730
昼間人口密度(平方和当たり)	4,451	2,219	3,133

出所 平成12年国勢調査

2 有松絞りの生産工程

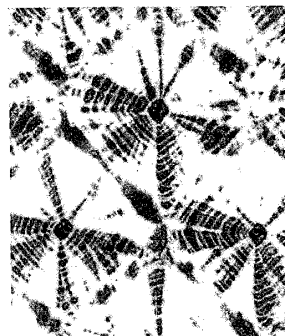
有松の絞りの技術は多彩で、蜘蛛絞り、紅染絞り、唐松絞り、折縫い絞りなど100種類を超えるに至っている。

有松・鳴海絞りの代表的なものをここに列挙する。

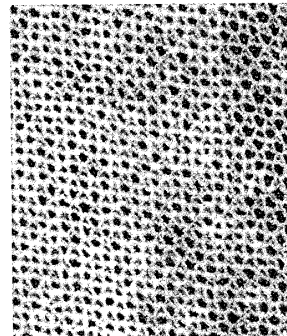
杓目縫い絞り、唐松縫い絞り、折り縫い絞り、巻き縫い絞り、合わせ縫い絞り、ひしゃき縫い絞り、手蜘蛛絞り、機械蜘蛛絞り、らせん絞り、巻き上げ絞り、小帽子絞り、横三浦絞り、やたら三浦絞り、疋田三浦絞り、横引き鹿の子絞り、人目鹿の子絞り、突き出し鹿の子絞り、蜘蛛入り柳絞り、みどり絞り、桶絞り、日の出ゴム段絞り、日の出絞りなどである。

典型的な絞りである「手蜘蛛絞り」と「疋田三浦絞り」を図示する³⁾。

図表2 手蜘蛛絞り



図表3 疋田三浦絞り



有松が全国的に絞りの産地として栄えたのは、木綿の生産地である知多郡が側に控えていたこと、東海道筋にあり販売に出かける必要が特に無く、通りがかりの旅人に販売することで生業とすることができたからであろう。また有松が絞りで栄えた最大の理由は尾張藩の手厚い庇護にある。江戸時代、尾張藩により有松は絞り生産の独占権を与えられたからである⁴⁾。

有松における絞りが盛んになるにつれて加工の生産工程は次第に分業化している。なお一般的に絞りの生産はおおよそ次ぎの工程からなっている⁵⁾。

①絞り製造問屋

絞り製造問屋は、製品を企画し、製造して卸売を行う。しかし加工の各部分が分業化しているので、以下のいくつかのパートに分かれた絞り工程を統括するのが絞商である。通常製品の構想、意匠、図案、配色などを決定して、布などの原料を仕入れて加工工程に回す。すべての加工が終わったところで、製品の検査を行い、製品を販売する。製造問屋も浴衣のみ、羽織のみ生産などの種類に分かれている。

②下張り、下のし

下張りは、下絵をつけやすいように適当な硬さの糊を塗布することをいう。特に疋田絞りのように布地に歪みがあると括りがうまくいかない場合は、この下張りが重要になる。

下のしは、糊による下張りに適さない布地を湯のしで幅を揃えることをいう。

③下絵

図案を絞り用の下絵として作成して、型紙に彫刻して青花液を使って布地の上に型紙をおいて下絵を刷り込んでいく。青花液は露草の花弁からとったものである。この下絵は括りで使用

した後は消すものである。下絵刷りが終わった布地を天火で乾燥させ、括り作業に回すことになる。

④絞り括り

括りは日本では、絞り産地近辺の農家の主婦の副業となっており、括りの種類が多いので、一人一種類程度の専門化している。括りで最も力が必要とするのは嵐絞りである。丸太に布地を巻きつけ、丸太を回転させながら糸をまきつけ、これを男性2人で押し縮めて括りを行う。

括り請負業者がさまざまな括り手に仕事を回して括りの仕事を統括している。なお、中国では括りは工場で行うのが通常のようなのである。

⑤漂白

絞りの括りの作業の間についてた汚れをとるために漂白作業が必要になる。通常、専門の工場で行う。漂白を行う業者を晒屋という。

⑥染め分け

何色かに染め分ける場合は、染めない部分の防染作業が必要になる。例えば5色に染色する場合は、5回防染作業が必要になる。

⑦染色

絞りの染色は、染液の調合、染色の時間など長年の経験が必要になる。見学した工場でも伝統工芸士の方々のたゆまぬ研究心で仕事がすすめられていた。染色を専門とする仕事を紺屋という。

藍染めの場合、染め、洗いの工程を何回か繰り返すことになる。浴衣の場合は6回程度繰り返す。

⑧糸抜き

染色が済んだ布地を乾燥させたあと、括りの

糸抜きを行う。括りの種類により糸抜きの方法が異なってくる。糸抜きは、湯のし業者か製造問屋が行う。

⑨湯のし整理

染色と糸抜きが終わった布地は、括りにより小さく縮んでいるので布地を蒸気をあてて幅だしを行う。どの程度の幅だしをするかは、着物の種類によって異なる。

湯のしの回数は木綿の場合4回、絹の場合6回程度を必要とする。この幅だしの仕事は専門業者が行う。

⑩付帯加工

括りのほかに、箔置きや刺繍などが必要な場合は、さらに専門の業者に加工を委託する。

⑪仕上げ検品

最終的な製品を絞り製造問屋が検品を行う。

なお以上のいくつかの作業工程を束ねる業者もいて、悉皆屋または影師と呼んでいる。

以上の工程のうち、括りをマスターするには、長年の修練を必要とする。この技術をもった方々が次第に高齢化しており、次第に括りの種類が減少している。ここではある括り手の方がどのように仕事をされてきたかを紹介したい。

有松の駅から歩いて5分、有松鳴海絞会館がある。この会館の2階で有松絞りの括り手の方が括りのデモンストレーションを行っている。最年長の方は94歳である。この独白は80代の年齢の方からお聞きしたものである。

「絞りの括り仕事は根気仕事で大変です。括りは有松近辺の主婦や子どもの仕事になっていました。私も小学校に入った7歳のときから絞りを始めました。その頃幼稚園などはないので、

小さなときから絞りをやれ、絞りをやれといわれて絞りの仕事を始めました。

そのために勉強をする時間はあまりありませんでした。括りは親に聞いたり、近所のおばさんに見てもらったっりして自然に覚えていくのが普通でした。小学校6年生になるまでには、女の子は、みな括りの仕方を覚えて仕事をやるのが普通でした。当時の有松は、そういうところでした。小学校から帰るとすぐ、絞りの仕事を始めました。

5人くらいの仲のよい友達といつも一緒に括りの仕事をしていました。括りの仕事はご覧のように大きな道具は必要としないので、今日は私の家、明日は友達の家というように仲のよい友人の家を回りもちで仕事場を変えていました。友人と競争で夜の11時頃まで仕事をしたものです。仕事をしてから村の銭湯の落とし風呂によう入ったものです。仕事は好きで苦にはなりませんでした。

学校から帰ってからの仕事で当時の金で、1日2銭儲けることができました。当時、1銭で飴玉10個買うことができました。米1升が50銭の時代だったのでよい収入になりました。子供でも有松は金儲けができたということです。絞りをしない友人たちは、親に1銭をせびっていました。私は自分で儲けていたので親に小遣いもらったことはありませんでした。親から小遣いをもらった経験はありません。

当時は死亡率も高く、私の後に生まれた兄弟は、若いときに2人亡くなり、弟は今71歳で12歳も離れています。絞りは、時間がかかります。絞りは括りだけでも大変時間がかかります。

私は蜘蛛絞りが専門です。蜘蛛絞りは蜘蛛の巣に似ているから命名されたのだと思います。蜘蛛絞りに13種くらいあります。手ぐも、手ぐも根巻、蛇の目、やたらぐも、手回しぐも、

石垣くもなどです。蜘蛛しぼりは主に浴衣に使われていますが、今は通常の服にも蜘蛛絞りを使っています。

括りをするときに手や糸を水に入れて仕事をします。水の中に糸を入れると締りがいいからです。乾くと手がすべる。冷たい水の中に手を入れるので冬は手がひびだらけになります。

昔は一軒に括る人が4人か5人いたものです。家族構成が大きかったからです。いまは括りをやる人が減って以前120種類ほどあった括りが今は50種類くらいに減っています。

私が死んだら蜘蛛しぼりは終わりかもしれません。後継者育成で教えているけれど、根気のいる括りの仕事の後継者を養成するのは大変です。」

3 有松絞り以前の日本の絞り

江戸時代以降、有松で日本における絞り製品の大半を生産するようになるが、江戸時代以前の日本における絞りについて簡単に述べておきたい。

絞りは簡単な技法でも生産できるため、世界各地で昔から衣服の製造技法の一つとして用いられている。日本でも倭女王卑弥呼が魏文帝に西暦238年に絞染めを貢したことが記録されている。また日本書紀にも7世紀にわが国を訪問した外交使臣に纈（ケチ）を贈ったことが記されている。当時、絞りを纈と呼んでいたのである。

奈良時代は、さまざまな絞りが作られており、東大寺献物帳などにその記録が残っている。

正倉院裂の中に纈こうけちと呼ばれるものがある。これが絞りである。赤地七曜纈纈、紺地目交文纈纈綾、黄地七宝文纈纈薄絹、襷文纈纈布袍など正倉院に保存されている⁶⁾。

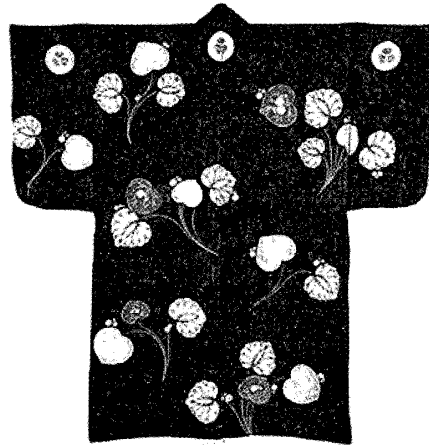
室町時代後半より江戸時代初期にかけて、絞りに革命が起こる。辻が花である。小袖・胴服に縫い絞り、帽子絞り、杳目絞りなどの絞に描

き絵を主に、時には刺繍なども加え伝統技法を結集して作り出した模様染である⁷⁾。

辻が花のネーミングには諸説あってはっきりしない。辻が花は女性の衣服だけでなく、男性も好んで使用した。

例えば、徳川家康が戦場に出かける際には、鎧の下にいつも辻が花の絞りの衣服を好んでつけたと言われている。家康の遺品として尾張徳川家に分け与えられた辻が花の衣服は数百点にも上ったという。そのうち、数点が徳川美術館に保存されている。

図表4 辻が花の羽織



上図の辻が花の羽織は「胴着（どうぎ）」と称されて四代吉通（よしみち）が、幼年のときに着用したとの記録がある。だが文様や仕立て寸法、染の技法からみて、「駿府御分物」の中から選んで吉通が愛用した羽織と解されている⁸⁾。辻が花は慶長期の後期に次第に文様におおらかさが消えうせ、染織は慶長小袖にとって代わられることになり、姿を消す。幻の辻が花といわれる所以である。

慶長小袖と呼ばれる染織の意匠は、江戸初期にあらわれるもので、桃山小袖とは違った複雑な文様の構成と黒を生かした色調に内面的な感情がこめられているものである⁹⁾。

4 有松絞りの創業、江戸時代

有松は当初、耕地面積が少ないところから、農業では生活が成り立たない環境にあった。名古屋城築城は慶長15年（1610）に始まり、慶長17年（1612）に完成する。築城の折、九州豊後からきた人たちの中に絞染めの衣料を着用していた人たちがいた。これを見て、手法などを究明して有松絞りを考案したといわれている。

当初手ぬぐいなど絞りにして軒先に吊るして販売していた。この絞は蜘蛛絞りであったといわれている。また豊後から移住した医師三浦玄忠の妻が絞りの技術を伝え、指導したといわれている。この絞りを三浦絞りまたは三浦玄忠の出身地の名をとって豊後絞りともいう。ちなみに三浦夫人の菩提は、鳴海駅から歩いて10分程度のところにある瑞泉寺に弔われている。

有松の絞りの発達は、2代目竹田庄九郎の功績が大きい。17世紀後半に「ゆかた」が一般に用いられるようになり絞りの需要が増加すると2代目竹田庄九郎は衣料としての絞り製品を開発し、染色も従来の藍染に加えて、紅染、紫染などの染色も開発し、産業としてと基礎を築いた。

有松村の開村にあたり、諸役免除と屋敷地を免租地とするなど尾張藩は有松に特別な保護を与えてきたことは前述したが、その後更に手厚い保護を尾張藩は有松に与えた。

絞りが盛んになるにつれて、有松近隣で絞りを始めるもの多くなり、粗製濫造で絞り製品の評判を落とすこともあり、有松の業者代表が尾張藩に他所の絞り生産の禁止を訴えた。尾張藩では、それを取り上げて他村において絞りを生産することを厳禁した。また、有松に「絞改会所」を設け、絞り用の生地官印を押し、絞染1反に対して付銀壺分を尾張藩に納めさせた。ただし、その半分は有松の村民に与えられた。

このように尾張藩から有松は手厚い産業保護を受けた。いわば、有松の絞業者は独占権を得たことになるが、これは天明元年（1781）である。

有松は天明4年（1784）に大火になり、全村焼失する。このとき、書類一切の焼失したためそれ以前にどれほど生産していたかは一切不明である。この大火後、尾張藩の手厚い援護で有松は比較的早く立ち直ることができた。

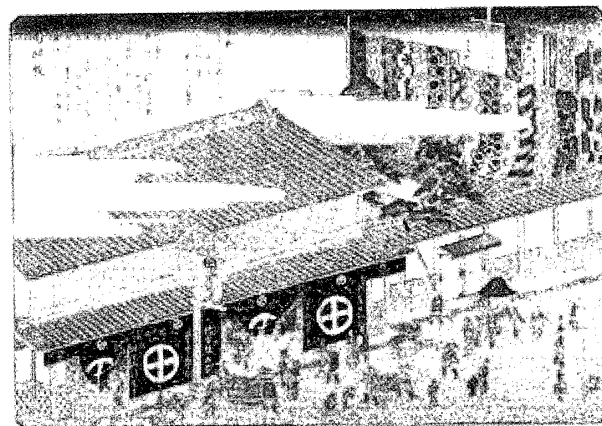
この大火の後、萱葺きの屋根を瓦葺に改め塗込め防火造りにした。この町並みの家屋のいくつかは現存して有松の美しい景観になっている。

有松大火のあと、「紺鹿の子絞」、「紺羅仙絞」、「養老絞」、「筋絞」など新しい絞りが有松で次々に考案された。この頃、絞業の統制が強化され、絞会所が設置され、株仲間が組織された。

5 歴史に現れた有松 浮世絵に現れた有松

有松は東海道五十三次浮世絵で5枚描かれている。初代安藤広重が「絞り店の図」（天保年間）、「絞り店の図」（天保三年、1832年）、「名ぶつ絞店」（嘉永年間、1850年頃）の3枚を描き、二代広重が「14代将軍家茂上洛有松通行の図」（文久3年、1863年）、一勇斎国芳が「名ぶつありまつ志ぼり」（天保中期、1837年頃）を描いている。

図表5 絞り店の図 初代安藤広重作 天保年間



近世資料にも有松は多く記述されている¹⁰⁾。いずれも当時の有松を髣髴させる貴重なものであるが、紙数の関係から、ここでは、次の2点のみを紹介する。

尾張徇行記（樋口好古著 文政5年（1822）、再刊 1976年 蓬左文庫）

「①この村は東海道筋にあり、元桶狭間村の支邑なり。慶長13申年はじめここに新町を造立し、そのころより里民絞木綿を仕出し旅客へ販ぎ生産とす。往昔は戸口少なかりしが、暫々絞木綿商い繁盛にしたがい戸口多くなり、町並商屋造営よくなれり。左右の家ごとに絞木綿彩色を種々染め粧い、竿頭に掛け店に飾り甚だ綺麗を尽くせり。今は縮緬絞なども仕出し、旅客いずれも足を留めて買い求め、商売殷富の地となれり。これ53駅の名産と呼べり。

②この村絞木綿、先年は直ちに江戸に運漕せしが、今は専ら名古屋木綿問屋へ積み送り、それより運漕す。木綿を曝すことは今山崎村においてするなり。また絞木綿の括しは木の山・桶狭間・鳴海・相原・大高・追分新田あたり村人婦女恒に手かけ賃を取り生産す。また鳴海村・大高村にては、絞染をする者あり。これは一反に付き銀2歩づつ運上を取るなり。

③有松絞綿布、府志土産条日、有松即桶狭支村也、当東海道其里民絞木綿、染成彩色、綺麗可愛、旅人以為名物。」

この資料によると、括りは有松近辺の村々の婦女の賃稼ぎとして広く行われていた。

また有松以外の鳴海村、大高村で絞染を行うものに対して運上金を有松が取っていたことが分かる。いわば、絞りがこのころ既に尾張藩の庇護のもとで有松が生産販売の独占権を掌握していたのである。

「一外交官の見た明治維新 アーネスト・サトウ著 慶応3年（1867）」

「翌日インドのバンダーナ（Bandhana）と同じように染める木綿の絞で有名な有松を通ったとき、昔から長崎のオランダ商館長が江戸参府の道すがら立ち寄るきまりになっていた店をたずねて、オランダ人が購入した品物の記載してある台帳を見せてもらった。昔から由緒ある先例に従うのは外国人の一種の義務でもあったので、私たちが数反の織物を買った。ずいぶん変な話だが、この織物は、作られる土地の名前で呼ばれずに、最寄の宿駅鳴海の名で呼ばれていたのだ。

野口と外国係の役人二人が値段を掛け合っていたが、ワグマンと私は値段のことなど全く眼中になりといったふうに傍観しながら、威厳をつくって黙々と煙草をふかしていた。

この店の主人は、明らかに町役人の役柄を持っている有力者で、家に数挺の火縄銃をおくことを許されていた。この町の家屋の多くは普通以上にながしりと作られていたが、それは生産品のおかげで土地が繁盛している証拠であった。」

この資料によると、有松の絞商の主だったものは町役人としての権限と厚遇を尾張藩から受けていたことが分かる。

6 明治・大正時代—有松絞り産業の発展

明治時代になると、営業の自由が保障されたため全国で絞りが生産されることになり、有松がもっていた絞りの独占が崩れ、また東海道の旅行者も激減し、有松における絞り産業は一時衰退した。図表6にその状況を示す。

明治10年（1877）に開催された第1回内国勸業博覧会に絞染めは京都、愛知のほか、東京、新潟、長野、山形、秋田、高知、福岡から出品

図表 6 有松絞の生産額（反）（1861～1874）

	綿布	縮緬	絹布	合計
文久1.12～26	29,133	29,133	13,737	52,871
元治1.12～26	85,402	17,576	5,140	108,118
慶応1.7～1.12	59,629	7,159	4,014	70,802
明治2.12～36	85,212	8,308	6,768	100,287
明治4.7～4.12	67,959	1,181	3,132	72,262
明治7.7～7.12	49,032	2,118	2,405	53,555

出所 「有松しぼり」 94ページ

されており、ほぼ全国にわたって絞りがつくられていたことを示すものである¹¹⁾。

この窮地を有松の老舗の竹屋、橋本屋、井桁屋などは販売網を拡充することで対応した。さらにこの頃、有松でさまざまな絞りが考案された。なかでも竹田林三郎は地白紺絞模様の捺染である「紺吹」を案出した。これは、夏の浴衣として広く愛用された。

また鈴木金蔵氏は、機械による絞りである「嵐絞り」を考案した。括りは通常一人で一反程度でしかできないが、嵐絞りは2人で一日20反の括りを仕上げることができた。鈴木金蔵氏は、有松絞りの再建の功により、絞り中興の祖として顕彰されている。

このような努力の結果、明治の中頃に有松絞りは再び全盛期を迎える。

すなわち、明治30年（1897）から45年の間に有松は絞染の改良や新案意匠の考案を行い、製法特許10、染色法特許10、意匠登録7の特許を取得した。これらの特許に有松は守られて全盛期を迎えたのである。明治35年（1902）頃には有松絞の生産反数は120万反にもものぼった。

明治38年（1905）には、絞の改良を図り、販路を拡充することなどを目的として「有松絞商工業組合」を結成した¹²⁾。

明治40年（1907）には名古屋の国産絞同業組合と有松絞商工業組合が母体になり愛知県絞

同業組合連合会が結成された。

大正5年での有松での絞生産額は105反で、大正8年は120万反に達した。大正時代は絹絞りが多くなり、和服のほかに、長襦袢、鼻緒、帯揚げ、風呂敷など絞りの生産が多角化した。有松での絞製品の輸送は名古屋まで馬車・人力車に頼っていたが、大正6年に熱田から笠寺、鳴海を通り有松に至る有松線が開通した。この線は現在名古屋から豊橋までの名古屋鉄道の元になっている。

7 戦前・戦後（昭和時代）の有松絞り

戦前の有松絞りの生産高は年間100～120万反といわれ、業況は隆盛であった。しかし、戦時中、従業者は徴兵、徴用にとられ、木綿は統制品のため割り当てではなく、技術保全のためにわずかにスフ織物が配給されていたが、大部分の業者は転廃業していった。

戦後、昭和23年（1948）から昭和24年（1949）にかけて、アフリカのコンゴに絞り製品を輸出することができて、このときの有松絞りの加工賃総計は1億3000万円に達した。この需要は1年間で消滅するが、この利益が有松での絞生産が活発化するきっかけとなる。

昭和27年（1952）に有松で絞りの製造・販売を行うもので有松絞商工協同組合を結成した。有松絞商工協同組合に加盟している業者は、昭和29年（1954）に34名であった。

昭和28年（1953）の有松絞の生産高を図表7に示す。この図表で受託加工とは、京都などの絞について、括りなどの一部の作業を受託したこによる金額である。

昭和35年（1960）以降、経済の高度成長が国民生活にゆとりをもたらし、伝統的な工芸品のよさが見直され、生産は回復をみせた。有松絞は昭和50年（1975）9月には通産省より「伝統的工芸品」の指定を受けている。

図表7 有松絞りの生産額（円）1953年

目 目	販売金額	受託加工金額	合計金額
綿布	524,872,965	4,929,900	529,802,866
絹布	187,255,850	27,599,640	214,853,490
スフ・人絹	33,758,485	641,220	34,399,705
総合計	745,887,300	33,168,760	779,056,060

出所 「有松しぼり」 180ページ

8 有松絞り産業の現状

有松絞りの特徴は、なんといっても絞りの種類が多いことである。最盛期には、括りと染めの組み合わせで100種類以上が可能であった。しかし、次第に括り手が高齢化し、現在は40～50の加工技法しか行われていない。

絞は、現在、愛知県県下で約65業者、年生産額は約80億円程度と見られているが、有松では23業者、年生産額は30億円程度である¹³⁾。

有松絞は前述したように多くの分業からなりたっている。しかしながら、近年絞り生産額が減少してきたところから、分業の一つだけを担当していたのでは生活がなりたたなくなっており、分業してたいくつかの工程を一人の人でこなすようになってきている。例えば、図案、型紙彫り、下絵刷りの3工程をこなす業者も現れている。

また、括り技術を持っている人は、高齢化して次第に減少しており、現在有松近郊で2,000人を割り込んでおり、実際に絞り加工を続ける人はさらに少ないといわれる。この結果、近年では括り作業の人手不足が深刻である。従って、現在は「括り」の工程のみ中国などの外国に委託しているケースが増えている。括りを外国に委託する場合は国内で括り以外の企画、デザイン、そして括った後の染色、仕上を主に行っている。

有松の絞りの生産、販売の実情をいくつか紹介する。

（絞りのひさだ 愛知絞販売株式会社 代表取締役社長 久田耕一郎氏）

「絞りのひさだ」の店は、有松の駅前にも立派な店構えをみせている。「絞りのひさだ」の本店は有松のメイン道路を駅から5分ほど鳴海寄りに歩き、祇園寺の前の小道に入ったところにある。この久田家は元禄年間に栄えた久田本家の分家にあたる。住居は明治初期に建てられ、平成6年1月末に改築された。昔から由緒ある家柄でいろいろな大部の古文書を見せていただいた。例えば江戸時代の勘定書きもかなり残っている。この勘定書きを見ると全国各地に有松絞りを販売していたことが分かる。有松で絞りを販売し、売掛金を江戸で回収した勘定書きもあり興味深い。

「絞りのひさだ」は現在、直売と卸を行っている。毎年、新商品を発売している。絞りを日常的な衣服に適用するためにさまざまな試みを行っている。以前は有松で洋服の絞りのファッションショーも行ったことがある。

（株式会社近喜 専務取締役 近藤久人氏）

昭和のはじめから韓国に括り作業を委託していたが、韓国の経済成長により、人件費も高騰しているので、最近では中国への括り作業の委託を増加している。中国への括りの委託は田中角栄氏による日中国交回復を受けて、間もなく京都の絞産業が中国の南京と上海と技術交流を1956年頃から開始してからである。

有松の株式会社近喜では主にゆかたを生産しているが当初、南京で括り作業を委託した。しかし、南京は日本の各地から括りを委託しているために他の産地の杜撰な作業工程に慣れてしまっていたため厳密な工程管理を行うのが困難

であった。そのため、現在は広東省に年1万反程度の括りを委託し、他に合弁会社のある南通に年5千反の括り作業を委託している。

中国への委託の失敗例としては、帯締め例がある。帯締めを生産している会社が、中国に工程すべてを委託したところ、委託量以外を中国が自主生産し、それを日本で売りさばいた。このため単価15,000円程度であったものが現在は1,000円程度になってしまった。同じような失敗例に兵児帯もある。このため、絞りでは、委託作業は括りの部分だけに限っている。

しかし、絞は現在、日本のほかに韓国、中国、インド、インドネシアなどで生産されている。生産量が現在最も多いのはインドである。中国では四川省、江蘇省、広東省、上海などで生産されている。中国ですべての工程をこなした場合の絞の価格は、日本での製品の10分の1程度で生産が可能であろう。

中国でも次第に賃金水準が上がりつつあり、元が切り上げということになると委託のメリットは更に減少する。このため、中国の奥地への委託先の変更を考えている。例えば雲南省などは有力な候補であるが、中国では省が異なると、工場移転は難しい手続きが必要になる。他の省への技術移転になることには、中国の省が消極的であるからである。

絞産業が直面している問題にプリントがある。絞りを写真で写して、写真製版して手軽にプリントして販売する業者がある。そのような業者は、不法にプリントしたものを帯、下駄、ゆかたなどのセットで4,000円程度で販売している。

絞りで作った場合は、浴衣の単価は38,000円から50,000円程度になる。このため、プリントとデザインで競合しないように、浴衣のデザインは毎年新しいものにしていく。

有松の絞りでは、小物へ次第に重点が移って

いる。また、有松の町自体を観光化して、有松の絞を活性化させる動きもある。有松の町での小売店も次第に増加している。

有松は「絞り」と「山車」と「町並み」の3点セットで観光化の要素を備えている。

9 有松絞り産業の新しい挑戦

9.1 有松絞り産業の問題点

有松絞りは江戸時代初期より現在に至るまで長い歴史をもっている。これほど長く地場産業として生き延びることができたのは有松絞りに大きな魅力が存在しているからであろう。しかしながら他の地場産業と同じように次のような多くの対処すべき問題点を抱えている。

・後継者の育成

有松で長い歴史の中で開発された100種類を超える多くの括りの技術を始め、染色、湯のしなどの多くの技術は後継者の育成なしには失われていくであろう。

・市場調査の必要性

消費者の将来のニーズの把握して、従来のきものへの依存度を薄めて他の製品への絞りの活用を広めていく必要がある。

・新製品の開発

韓国や中国での絞り製品との競合を避けるために形状記憶など高度加工の新製品を開発していく必要がある。

・生産体制の刷新

新しい新製品の開発に伴い、生産体制も刷新して近代化していく必要がある。

以上のような問題点に対して、有松ではさまざまな挑戦を行っている。そのいくつかを紹介する。

9.2 新しいイメージづくり

ゆかたを主に生産されている株式会社近喜専務取締役 近藤久人氏に絞りの新しいイメージづくりについてお聞きした。

「最近は、着物を着る機会も減っているの
着物の絞だけに依存していたのでは絞産業はジ
リ貧に陥る可能性がある。しかし、若い人に浴
衣をきる傾向が復権しつつあり、しぼりを施し
たゆかたはかなり今後も有力である。

良いものを作っても人に知られないと売れな
い。そこでブランドづくりをすることが必要に
なってくる。若い人は、絞りをダサイという。
このイメージを払拭するためにノンノなどに雑
誌広告も行っている。しかし、最後には見てハ
ットするような素晴らしい製品をつくること
が大切であろう。女性の美に対する素晴らしい
感性に期待している。」

9.3 形状記憶への挑戦

有松で竹田嘉兵衛商店の社長、竹田浩己氏の
先祖は、有松絞りの産みの親とも云われる竹田
庄九郎家から250年程までに分家した家系であ
る。案内していただいた茶室は、本来本家のも
のであったが、本家が有松を離れる際に譲っ
てもらったものである。この茶室は将軍徳川家茂
が下校する際に立ち寄ったといわれる由緒ある
部屋である。勝海舟の書の棧が飾ってあった。
竹田社長のお話を、この由緒ある茶室でお伺い
できた。

「有松絞りは、現代では日常生活における和
服離れで、このままでは衰退していく危険があ
る。絞りが生き延びて今後も発展していくため
には絞が日常生活に根を下ろす必要がある。日
常の中に根を降ろしてこそ、現代産業として成
り立ち、職人が生き残れることになると思う。

絞りの活性化の試みとして愛知県名古屋市で
1992年に国際絞り会議の開催した。

有松の絞り関係者が主催者となり世界20カ
国から850人の絞りのデザイナーや研究者が参
加してパネルディスカッションやファッ ショ

ンショーを行った。

有松絞りを世界に広く紹介できたと思う。そ
の後1996年にインドのアーメタバードで第2回
の国際絞り大会を開催し、第3回は1998年にチ
リのサンチャゴで開催された。

この会議で絞りとは何かという議論を行っ
た。昔から現代まで2000年以上も絞りは生産
され続けている。この絞りの魅力は何かとい
うことを検討した。当初、有松側では「絞りは糸
による防染技法」であると主張した。しかし、
議論の中でアメリカのスミソニアン美術館の方
が主張された「シェープド レジスト ダイニ
ング (Shaped resist dyeing)」(立体的に防
染された染め物) という概念が正しいのではな
いかという結論に達した。

つまり、絞りとは糸による布の造形である
ということになる。これは大きな発想の転換にな
り、この概念を利用して、日用品として使われ
ている洋服に絞りを使うことができるようになった。

従来の手ぬぐいや浴衣などの絞りは、括りを
した後、染色を行い、括りの糸を抜いて、防染
されて白く残った部分の模様を見せるため、湯
のしをしてシワをのばして商品化していた。考
えてみると、糸抜きをしたばかりの皺を見て、
美しいと感動することがよくあったと思う。

今回の絞りの定義により、シワをのばさず一
番美しい状態で絞りの凹凸を形状記憶させて使
うことを今、「新しい絞り」と呼んでいる。

手仕事による括りによってできたシワを形状
形状記憶というハイテクの技術を加えること
によって現在のデザインが可能になった。

三宅一生さんがパリコレでこの布を使った作
品を発表し、コシノ・ヒロコさんなどの日本の
他のデザイナーもこぞって、この布を使った服
を発表した。現在、この布で作ったワンピース
などをアメリカで販売している。

洋服だけでなく、有松の絞りの布をインテリアへ利用する方向も有松絞商工組合が中心になって研究している。

ものづくりには技術の進歩は必要不可欠であるが同時にものづくりの本質を忘れないようにしなければならない。」

繊維の形態安定（長期にわたる繊維形状の保持）を熱処理により可能にする「電磁誘導加熱式オートクレープ」は中部電力技術開発本部で開発・商品化した。電気による優れた温度制御性により化学繊維だけでなく、これまで困難とされてきた天然繊維の形態安定が可能になった。これを地場産業である絞り製品の皺を安定させるために実証実験を繰り返して綿や絹などの天然繊維を素材した絞り製品の独特な絞り皺を保存することが可能になった。この機械は現在、有松の絞り会社に数多く導入利用されている。この電磁誘導加熱式オートクレープで処理した絞り製品は「エコ・シェイプ」として販売される予定である¹⁴⁾。

9.4 絞り産業と陶磁器産業の融合

地場産業再生への一つの試みとして絞り産業と陶磁器産業の融合を試みている柘植氏の試みを紹介する。

ギャラリー&ショップ クリエーターズこらぼ社長の柘植淑孝氏は絞り産業に新しい風を吹き込もうとしている。柘植氏の経営するクリエイターズこらぼは有松のメイン通りに魅力的な店を構えている。2階には、意欲的な絞の作品も展示している。

この柘植氏が中心となり、地場産業再生へ向けて、有松・鳴海絞と常滑焼が業種を超えて連携を試みて、新しい感覚の商品創造を行おうとしている。2001年に行われた常滑焼の展示即売会に有松・鳴海絞組合と相談の上、絞りの模

様を施した陶磁器を焼いて話題になっている。

さらに、最近常滑の陶芸作家と有松絞りの製造卸業者とがタイアップして事業を推進しようとしている。絞りに常滑焼の技術の何を取り入れることができるのか、常滑焼側と有松・鳴海絞側の双方にメリットがなければ、この事業は長続きしない。

もともと、陶磁器産業と絞りの連携はこれが始めてではない。江戸初期の織部焼きに絞りの文様を取り入れた鳴海織部があるからである。

当初、有松・鳴海の絞り関係者は提携によりメリットはあるかと慎重論が多かった。また常滑側も絞りの陶磁器の融合とは何かという慎重論が多かった。しかし、国の「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が改正されて新商品の開発に補助金が利用できることになった。有松・鳴海側では柘植淑孝氏が推進役になり「常滑焼、有松・鳴海絞連携活性化三ヵ年計画」を中部産業局に申請した。

目的は「デザイン、ファッション性、使い勝手などで日用品として使える商品を作って、絞産業の再生につなげる。」としている。

9.5 他の産地での絞り産業の新しい試み

京都絞工業協同組合は現在、参加会社数が50社である。京都絞りでは、当初従来の小幅布地にこだわっていたが試行錯誤をくり返した後、広幅布地の生産へ取り組みを基にして、インテリア部門、洋装品部門などのファッション分野への進出を図っている。

生産の分野ではこれまでの専門分業体制を総合生産体制に切りかえることを図っている。これは広幅布地の生産には絞り加工、染色等で新たに技術開発が必要となるからである。このような新たな取組みのためにファッションに関する情報の収集に努めるとともにユーザーよりの情報収集にあたっている¹⁵⁾。

結び

有松絞り研究は、東邦学園大学地域ビジネス研究所の地場産業研究部会で共同研究を続行中であり、この論文は、有松絞り研究の一里塚に過ぎない。

有松のまちづくりなども含めた総合的な論文を共同研究者と共にまとめることができるように今後も研究を続行する予定である。

最後にこの論文は、有松まちづくりの会の成田治氏、有松町ボランティアの竹安一郎氏をはじめ多くの方々のご協力でまとめることができた。厚く感謝したい。

インタビューまたは訪問させていただいたの方々

竹安一郎氏（有松町ボランティア）

成田 治氏（有松まちづくりの会 事務局長）

有松絞商工協同組合 理事長 近藤好彦氏

株式会社近喜 専務取締役 近藤久人氏

竹田嘉兵衛商店 取締役社長、愛知県絞工業組合 理事長 竹田浩己氏

ギャラリー&ショップ クリエーターズこらぼ 社長 柘植淑孝氏

絞りのひさだ 愛知絞販売株式会社 代表取締役社長 久田耕一郎氏

合資会社 藤記染工場 社長 樋(はじ)力氏 (伝統工芸士)

舂屋 社長 山田修平氏

早垣染色株式会社 社長 三浦典久氏 (伝統工芸士)

有限会社紋染色 久野染工場 取締役 久野剛資氏

中部電力技術開発本部 清水真男氏 (常務取締役、技術開発本部長)、加藤龍義氏 (エネルギー応用研究所所長) ほか

括りの方々 本間とめ子氏 (蜘蛛絞り84歳) 松岡清子氏 (竜巻絞)、加藤かね氏 (98歳、三浦絞)

〈注〉

- 1) 有松しぼり編集委員会「有松しぼり」(財団法人) 有松絞技術保存振興会 (1972年10月)、18~19ページ
- 2) 同上書 111ページ
- 3) 国際絞り会議「世界の絞り」国際絞り大会運営委員会 (1992年11月)
- 4) 有松しぼり編集委員会 前掲書 66ページ
- 5) 沖津文幸「絞り染めの技法」理工学社 (1984年4月) 116~120ページ
- 6) 松本包夫「正倉院裂」京都書院 (1993年11月) 68~71ページ
- 7) 日立デジタル平凡社「世界大百科事典」(2002年)
- 8) 徳川美術館ホームページ
<http://www.cjn.or.jp/tokugawa/index-j.html>
- 9) 河上繁樹「辻が花」京都書院 (1993年7月) 91ページ
- 10) 竹安一郎「近世資料における有松描写」(メモ) (2003年7月)
- 11) 沖津文幸 前掲書 111ページ
- 12) 有松しぼり編集委員会 前掲書 121ページ
- 13) 岡崎信用金庫 地場産業のページ
<http://www.okashin.co.jp/jiba/index.html>
- 14) 中部電力技術開発本部 パンフレット「電磁式加熱式オートクレープ」(2003年)
- 15) 中小企業団体中央会 ホームページ (先進組合情報 京都絞工業協同組合のページ)
<http://www.chuokai-kagawa.or.jp/>

参考文献

- (1) 有松しぼり編集委員会「有松しぼり」(財団法人)有松絞技術保存振興会(1972年10月)
- (2) 堀江勤之助「東海叢書第20巻 有松・鳴海絞」名古屋鉄道株式会社(1978年4月)
- (3) 有松町史編纂委員会「有松町史」有松町(1956年3月)
- (4) 国際絞り会議「世界の絞り」国際絞り大会運営委員会(1992年11月)
- (5) 名古屋市「新修名古屋市史 第3巻」ぎょうせい(1936年3月)
- (6) 岡崎信用金庫ホームページ 地場産業のページ
<http://www.okashin.co.jp/jiba/index.html>
- (7) 沖津文幸「絞り染めの技法」理工学社(1984年4月)
- (8) テレビ東京、愛知県絞技術保存会「匠の世界 NO.12 いま浮世絵にあるごとく」(ビデオ)丸善(1989年)
- (9) 河上繁樹「辻が花」京都書院(1993年7月)
- (10) 松本包夫「正倉院裂」京都書院(1993年11月)
- (11) 樋口好古「尾張徇行記」蓬左文庫(1976年3月)
- (12) アーネスト・サトウ「一外交官から見た明治維新」岩波書店(1960年)